

るので、くそ真じめにやり始めた。先づ電車に乗りつまさきで毎日往復立ち登校するとすぐ練習着に着かえ、10分間の休みにはロクボクにジャンプをし、昼の時間はかべ打に、自習の時間はもち論(ソフトボールをしたかったが)かべ打ちに費やした。練習が終って帰る次オ大橋9丁目から国鉄須磨駅まで毎日夜走った。走って帰る次オビールびんに水を入れ、それを両手で毎日振った。寝るには腹筋をふとんの上でやった。その間約3ヶ月間ぐらいだったと思う。バレーボールの本を何回も目をとおした。このきき目がたちまち現われた。かべ打はいく

## 現役時代の思い出

3年間という月日は、苦しい又楽しい思い出であつた間に過ぎてしまいましたが、僕にとって、多くの先輩、後輩達を知り大変有意義だったように思われます。

合宿生活に於けるあの和やかな奮闘気、部室でいろいろな談笑、新年会(?)の打ち解けた言葉のやりとり、どれも思い出せば楽しい気分になったり、ブーと吹き出しそうになる様な事ばかりで、もう一度あの楽しかった時代に帰ってみたいと思えます。(といっても今の生活がつまらないというわけではありません)

又大会に於ける思い出はよく覚えていませんが、3年の秋に兵庫、葦合に勝って優勝した大会が一番印象深いです。あの時は予期していなかった優勝で先輩達も全員喜んでいただき、それまで主将として十分な事が出来なかった僕でしたのでホッとしたというのが真情だったようです。対兵庫戦1セットを奪われ、半ばあきら

らでもできるし、ロクボクのジャンプ、その他チームの中では誰にも負けない根性とスタミナがついた。これからがアタッカーのオ一歩であった。自分でアタックをおぼえたので腕が曲がった。けつたいなフォームになったが、アタッカーとしてのおもしろみが出て来始めた。アタッカーをやり始めた関係上、H・Lという位置なので、どうしてもレシーブをやり始めてから腰が高くなってきた。

この方法を先輩に教えてもらったのであるが、やはり先輩がめしを余計に食っているだけの事はあるなあとつくづく思った。

松山 誠 二(昭和40年卒業)

めていましたが2セットより皆調子が出て、無我夢中で勝ちを収めたというところで、特にこれといったプレーはありませんでしたが、14-10で最後僕がストップにいつて決まったと思つたらオーバーネットだったというプレーが頭に残っています。対葦合戦では12-12から長い間スコアが動かず、緊張した場面やベンチからの指示にはただうなづくだけで、実際プレーに出ていなかったという事等思い出されます。最後にどうしても忘れられないのは試合に負けてベンをかいした事で、自分ながら情けない程でした。以上簡単で、しかも要領を得ない文章ですが、編集の皆さんによりしくいつておいて下さい。

追伸 また誰か松本の方面にいらっしゃる時は是非連絡下さる様お伝え下さい。

## 星陵クラブを思う

由つて生ずる所

永田 章 (昭和26年卒業)

星陵クラブが発足し今日を成した要因は我田引水の感があるにしても、昭和25年の国体兵庫県予選の竜野高校との優勝戦にあつたのではないかと思う。

当時の高校バレーの目標は夏のインターハイ、秋の国体の2つであつた。当時の星陵バレー部は小林先輩の築かれた礎の上に大きく飛躍しつつある時期であつた。小林先輩を監督とし戦後初の合宿をまず春休みにおこなつた。その結果実力はますます上昇し、夏のインターハイ兵庫県予選に優勝し得る目度がついたのである。当時の全国高校界での兵庫県のレベルは相当高く兵庫県で優勝すれば全国でベスト4は確実であり、又うまくいけば全国征覇も可能であつたのだから、兵庫県での優勝の目度がついた事の意味は相当大きかつた。ところが絶対の自信を以つてあつたこの試合では伏兵夢野台高校と準決勝でセットオールの末敗れ、その夢野台高校が翌日の優勝戦では竜野高校を破つて優勝してしまつたのである。これは実に口惜しかつた。

この敗因は今考えてみると矢張スタミナ不足と速攻に振廻されたストップにあつたと思う。この準決勝は実に当日の6試合目であつたと記憶して居る。(6試合目と云うのは当時の6回目の対戦相手と云う意味である)然も前年までの試合では大体に於てよく勝つても2回位、その他は練習試合と云う事でこれだけの試合数をこなす事に就ての経験不足から相手の強弱に拘らず、全試合に主力を使い、尚全力をつくして戦つて来たので、この試合あたりで非常に疲労の度が強くなつて居た。そこへ相手のF・Rへボールを集め、F・Cの頭を越した早いトスをF・Lが押えるという攻撃型にやられ、この又、F・Lのホールディングくさいタッチにタイミングの合わなかつた事が敗戦と云う最悪の事態を招いたのではなかつたかと思う。

然しこのインターハイ予選に依つて得た自信と経験は其後に大いにプラスになつたのである。当時は練習試合以外はこのインターハイ以後は秋の国体予選まで正式の試合はなかつたので、それ以後は秋の国体予選を目指して必死の練習に入つたのである。

参考の為に当時の不動のメンバーを紹介するならば、

F・L 谷本	F・C 永田	F・R 吉川
H・L 田中(基)	H・C 三島	H・R 数井
B・L {宇野 浜地	B・C 田中(昌)	B・R 柏木

と云うメンバーであつた。

私の現役時代  
2年間とことん指導に  
いたつた。  
9才上とは思ふが後  
輩の指導者であつた

主力アタッカーは谷本、数井の両者であった。インターハイ敗北後重点を置いた練習は、永田、谷本コンビのクイック攻撃と数井のスライクの実績、それにスタミナである。これから夏の合宿を挟んでの予選までの練習は実に苛酷なものであった。と同時にそれは優勝を狙うチームのみの持つ練習のムードがあった。小生も最近のチームの練習を時々拝見するが、練習の苛酷さはそう変わらないにしても、この独特の練習中のムードは感じられた事はない様である。

この練習のお陰でクイックのスピードは非常に早くなり練習試合を通じての経験からも、ストップはタイミングで抜ける自信を得、同時に数井のスライク、全員のサーブ、レシーブ共大きく進歩した。

国体予選は当時の西宮体育館横の屋外コートで行なわれた。小生時々仕事の都合で車で通るが、今は団地が立ち並び、昔日の面影は全くない。そう言えばインターハイの行なわれた明石コートは今のコートが出来上がる寸前でまだスタンドはなく、コートの下地のみがしてあった。

当日の試合は矢張準決勝までは問題なく勝った。小生も一体相手が何処であったのか全然記憶もして居ない位である。このあたりに優勝のみを狙って居た特徴もあり、又弱小チームを最初からのんで居たようである。

組合せではインターハイ優勝の夢野台高校と同一ゾーンであり、相手ゾーンには竜野高校が居たのでこの2校の試合のみにウェイトを置いて居た。そしてウェイトの重さは対夢野台戦であった。インターハイの恨みがある。全員が何としてもこの恨みは、はらさしておくものと云う気持ちであった。そう言えば当時のチームには何とも気の強い奴ばかりが揃っていたものだ。

小生を筆頭に谷本、数井、吉川、三島、両田中と気の強い事に於ては人後におちぬ奴ばかりである。その結果夢野台高校との準決勝は全員の気迫とインターハイの苦汁を生かした練習法と練習量が物を云って殆んど問題にせず勝利を収めた。

小生今だに思うのであるが、この“同じ奴に2度負けられるかい”という気力、物の考え方は何時も大事ではないかと思う。相手もインターハイに出場し、経験を積み、優勝校としての練習もして来たのであつたらうが、これに比較的イージーに勝つたのはこの気力であろう。又、悪かった事を素直に反省し、それをカバーする練習を積んだ事もその要因である。

この試合に就ても記憶は殆んどないが、唯小生と谷本のクイックが何本か相手H・C・の前に突きささる様にきまった事のみが網膜にやきついて居る。かくしていよいよ優勝戦と云うことになったが、相手ゾーンは予想通り夏を経験すれば強くなると云う竜野高校が勝ち進んで来て居て、これと対する事になった。

優勝戦は全くのソーゾーゲームで1セット目からサーブを持った方が相手に1点を取られると云う事で6人制であれば、何時までも0:0で経過して行く状態であった。この試合確か2セット目であったが、小生がストップから下りた際人の足の上ののっかり捻挫をしてしまった。実に痛く一時はど

うなるかと思つたが、当時からメンバーの少なかった星陵では交代は許されない。幸い主審の山の内さんは柔道の心得があり、何とかもんでもらって試合を再開した。試合はフルセットになり、然もジュースにもつれ込んだ。その後も尚1点づつの点の取合いになり何時までも勝負はつかなかつた。この頃には当日同時に行なわれて居た一般男子の予選も総て終了し、多くの人達がコートを取り廻いて観戦して居た。見て居る人にとっては、この死闘は舞台こそ御粗末であったが、そこで繰り広げられたイベントは実に最高のものではなかつたかと自負して居る。然し勝利の女神は我に味方せず相手にその微笑みを投げかけ目前にした勝利を逃したのである。試合後非情なスコアボードは30:32の数字を示して居た。

この後、谷本、永田、数井、柏木の4人は卒業したが、各々、谷本は外大で数井は兵庫クラブで小生は商大で活躍して居たが、云わず語らずのうちにあの時のメンバーで戦ってみたいという願望があり、星陵クラブの名称でO・B・のクラブを結成したのである。その後、宇野、田中(基)、も卒業後は関学へ、吉川も神戸大学へとそれぞれの道を歩んだが、バレーへの情熱は消えるべくもなく、大学不参加の試合には各々馳せ参じて試合をしたのである。成績は出れば優勝または準優勝と云う事で大いにその勇名を轟かせたのである。

市民大会、朝日バレー、OB大会、みなとの祭等々常勝ではなかつたかと思う。然もそれ等に優勝した事の意味の大きさは当時あつたクラブチームはそれぞれ関西6大学の一部で活躍して居たレギュラーメンバーを3~4名は含んで居た事である。それ故当時の朝日バレー、O・B・大会は、6大学一部リーグ戦の試合とさして差のないレベルで行なわれて居り、そこでの優勝は相当高い評価の勝利であつたのである。特にO・B・大会での3連覇は大いに価値あるものであつた。

O・B大会の秀逸はエトランゼと称する五十嵐先生率いる外人部隊で在神高校以外の出身者の中からメンバーを集め、チームを編成して毎試合出て来た。これが又仲々あなどれぬ力があり、O・B大会を面白いものにして居た。それもその筈五十嵐先生の顔で当時の6大学一部の中でO・B大会に出られない人達をかり集め、然も脇村氏等兵庫クラブからも人集めをして居るのであるから相当な実力であつた事は当然である。然し不幸にして一度も優勝にまではいかなかつた様である。

この様な事で当時関西6大学のメンバー、兵庫クラブ等強力クラブのメンバーが大学O・B大会に出場するのでこれに負けるとどうも其後の大学の練習試合等で大きな顔も出来ず何だかんだと云われるので何としてもO・B大会には勝っておかねばならなかつた。小生は3連覇のお陰でその辺では大分楽しい思いをさせてもらった。

かくして星陵クラブの基礎は固まり、今日を成して居るのである。この結束の固さは何時までも保持したいものだ。

然しどうも最近バレーの試合の方はだらしかなさ過ぎる。高校卒業後3年や4年でもう年寄顔でこの程度のものだと考えて居るきらいがある。若手O・B・諸君よ奮起してバレーも強くなってほしいものだ。

## 星陵クラブを想う

藤岡義典（昭和36年卒業）

学校を卒業して以来、時が経つに従って星陵でバレーボールをして良かったとつくづく思う。もちろん、現役の頃も、そう思っていたが、その頃はたゞバレーボールが出来るといっただけの理由で別にそれがサッカーであっても野球であっても良かったわけである。

今考えて、何がもっとも良いことであり、また何故最近になる程良かったと思うようになったのかを考えてみると、それは「人間関係」の問題ではないかと思う。より詳しく言えば、「人間関係の勉強の仕方を習った」ということではないかと思う。

僕は去年、初めて社会に出て、会社なる組織へ入ったが、社内はもとより、社外の人に対しても、色々接触してゆかねばならない。そして、そうした人間関係はいつまでも「良好な状態」を保たなければならない。というのは、例え相手が個人であっても、会社であっても、団体であっても、それは自分の属する組織との関係になるからである。たとえ、相手が不具載天の敵としか思えない野郎であっても、顔を見るのも嫌な人間であっても、ニコリ笑って「ありがとうございました」とやらねばならない。また社内においても、会社というものが、ある目標に向かって活動している以上、全員一致協力せねばならない。

そこでも当然良好な人間関係が継続して維持されねばならない。この事に関して僕の感じでは、今一番の問題は、セネレーションギャップという点にあると思う。定年前の人間と20才そこそこの人間でも共通の場で協力してゆかねばならない。ところが、こういった年齢差があると、意識のズレがあって、仲がうまくゆかないケースが多い。特に、戦前派の教育を受けた人間と、戦後派の教育を受けた人間とでは非常なズレが感じられる。

学生のときであれば、嫌な奴、気の合わない奴とはつきあわなかったらそれで済むが、社会に出たらそうは行かない。最近、痛切にそれを感じる。そうした点星陵クラブでは、縦の面でも、横の面でもそれぞれ広がりをもっているから非常に勉強になる。

もちろん勉強といっても、「これこれ、しかじかにやれ。」と理屈で教えられるわけではない。自然に憶えてゆく、いわゆる肌で感じとるというやり方であるが、これが今一番、役に立っていると思う。

実は僕は大学で、「人間関係論」（もっとかっこよく言えば、ヒューマン・リレーションズ）略してH・R（エッチな関係ではない）を専攻したことになる。ところが、現在のところ、これが役に立っているとは思われない。全然役に立たないというのではないが、余りにも理論が現実と遊離

して、すぐには役に立たない。（とって授業料をまけてもらいに行こうとは思わない。それはそれで先で役に立つと思うから）

僕と同期の人間でも、会社に入ってから人間関係の問題で悩んでいるのもいるし、ノイローゼで会社を1ヶ月程休んだのもいる。僕も初めは、やはり気になり疲れたが、それでも何とか切り抜けられたのは、星陵クラブでの経験が役に立ったと思って感謝している。

また、クラブ員諸氏の、押しの強さ、あつかましさ、凶々しさも今の仕事の面に大きなプラスがある。仕事では、謙虚さはもちろん必要であるが、何よりも積極性、自主性が要求されているが、星陵クラブには、こうした点で生きた見本と言える人ばかりなので、今後共、色々勉強させてもらいたいと考えている。

学生時代から、今まで数多くの先輩に接して、それぞれの人から、それぞれ違った点を勉強させてもらったが、やはり少しでも長く交際してもらった先輩程、受けた影響は大きいように思う。

永田さん、武谷さん、森本さん等には、特にお世話になったし、今もなっているが、中でも現役の頃永田さんには毎日コーチしてもらって、思い出も多い。

永田さんには僕が2年の時、約1年間連日のように指導してもらい、どうやらバレーらしきものがやれるように教えてもらった。初めは、ずい分とつき難い、恐い先輩だと思っていたので、当座はびくびくしていた。毎日おそるおそる練習に出ていったが、それでも永田さんのような先輩に教えてもらえるといったうれしさも半分あって、結構楽しかった。そのうち、打ちとけるに従って、永田さんは恐い人でも、近より難い人でもなく、親切でやさしい人だとわかってきて、毎日の練習が待遠しくなってきた。

特に永田さんに教えてもらった点で今も感謝しているのは、「規律」ということと、「チームワーク」の必要性と、その持つ力を教えてもらったことだと考えている。その時のチームは、これという凶抜けた選手もいなかったし、何よりも全員が体力的に他チームより数段劣っていた。それでも、3部から1年のうちに1部で優勝するまでになれたのは、時間差攻撃という一つの絶対自信のある“型”をもっていたのと、チーム全体の気持ちが非常にまとまっていたことだと思う。

ボールが円藤さんのところへ帰ってきたら、絶対にもらったと思ったし、又実際に面白いように決った。このプレーも、初めは田吾作のような我々には、とても上手に行かず、10回やれば10回とも失敗していたが、練習するに従って、だんだんそれが9回になり、8回になり、7回になっていったが、ある程度まで行くとあとは加速度的に上手く行ったように思う。その間永田さんは熱心に、飽きずに何度も何度も指導して下さったが、こうした良い指導者に恵まれた僕らは本当に運が良かったと思ひ感謝している。弱いまゝで3年を過していたら何も残らず、プラス面も少なかったらと思う。実際あの当時のチームワークは最高だったと思う。気持ちがしっくりと一つになっ

て気持ち良かった。今も懐かしい、しきりにやったY談をも楽しかった。

特に人生のうちで最も色々な影響を受け易い、重大な時期に身近に心酔出来る人を持てたということは、僕にとって非常に大きな幸運だったと感謝している。その頃、何とかあんなプレーをしたい、あんな人になりたいと思って永田バスの仕方や口調はもちろん、歩き方まで真似をした。

日曜日に2人だけで練習をしたことや、家へお邪魔して勉強の仕方を教えてもらったことなど、いつまでも忘れないだろうと思うし、何とか教えてもらったことを実行して、一人前の人間となることが古い言葉だが、最上の恩がえしだと思っている。

その他にも、多くの先輩に公私に渡ってお世話になってきたが、今後共末永くお付き合いしてもらい、バレーができない年になっても星陵クラブが続くようお願いしたいと思う。

## 星陵クラブの現状に一言

中 島 正 人 (昭和36年卒業)

星陵クラブ! この伝統ある名のもとに、我々は高等学校卒業以来バレーボールをやっている上に誇りに思うことは、他にありません。しかし、今現在の星陵クラブの内容はどうでしょう。試合に出て勝つ、色々な試合に出る、これだけでは本当のクラブの意味はありません。試合がどうであれ、クラブ組織としてりっぱに今の星陵クラブは運営できてはいます。しかし、僕が今考えるに一寸何か星陵クラブというものに足りぬことがあります。やはり色々な試合に出て勝って欲しい、優勝して欲しいという単純なことです。おかしいでしょうか。何故なら、私が現役時代にはその当時の立派なOBの人々の数々のはなばなしい戦歴をきき、そのOBの人々にあこがれをもったものです。又そのプレーにもあこがれ、目標にもしました。が今はどうでしょうか。大部違っていると思うのです。これは若い者の責任でしょうか。一言に言ってそれもあると思うのですが、そのほかにも追求していくと諸原因があるのではないのでしょうか。若い私がこの様な事を書くとなまじきな奴だといわれると思いますが、どうぞその点は若さで許して下さい。

註 彼は古手OBが引込みすぎずに、もっとハッパを掛けるなり、リードするなど、まだまだ活躍するべきだと言いたいようであります。

編 集 部

## すばらしき星陵クラブ

山 崎 典 雄 (昭和37年卒業)

社会のつめたい!? 世界に入って5年、世の中がかくそう、かくそうとしている悪い点もそろそろわかりかけてきた時期です。サラリーマンとして会社の組織のごく一部、その一部のポジションの中で、いろいろなやむ時期でもあります。学生時代のことが非常になつかしく思えるのも私だけでしょうか。いろいろのポジションで御活躍の方々もなんらかのストレスを大なり小なり感じておられることでしょう。こういう時に本当に心のそこから話し合える仲間のいる伝統ある星陵クラブの一員となれたことは非常に幸福です。勤めの関係で試合、練習に参加出来ませんが、会合等にたまに参加させて頂き、元気に話し合ったあとの楽しさは格別です。今後もできるだけ参加し、星陵クラブのあらゆる面での活躍をこの目で見てゆきたい(傍観者としてではないので念の為)幹事さんご苦労様、良い催しを期待しています。

—— 社会から消されようとしている男 ——



永田章（昭和26年卒業）

この記念誌の発刊を1人難しい顔をして心から喜んで居るのは小林さんではなからうか。

数井、谷本、そして小生と云う気かん坊共をバレーを好きな故に伝統を作りたいが故に大きな目で育てて呉れたのが小林さんである。

我々は“御大”と呼んでいた。とにかく偉大なる指導者であった。この人が居なければ小生や谷本の様な少々我がままな人間がコート造りに汗を流す事はなかったであろう。小生は今でも思い出すが、コートが出来上って胸が少しはれて居るなと思っていたら何時までたってもそれがひかない。肉がついていたのである。

その時は小生アッコの黒光りした体を思い出して苦笑したものだ。然しこの時も小林さんは我々の2倍もやって居た。常にそうであった。辛棒づよく我々を指導して呉れた。

この小林大先輩のバレーへの情熱が我々に伝わり、そして現在に至って居るのだ。

小林さん喜んで下さい。星陵にももう他校に負けない伝統が出来ました。これも総て小林さんのお陰です。

何時かの合宿で非常に蚊の多い時があった。その時は小林さんは別の部屋で寝て居られた。

我々は蚊の来襲と日中の疲れから来るイライラで“何故こんなに蚊が多いのだろう”と云った処、数井が御大が向うに寝て居るので蚊も遠慮してこっちへばかり来るのだろう。と云って大笑いした事がある。それ程偉大であったのだ。

今度のOB総会には是非来神して皆と語り合って頂き度いものだ。

## 先輩のこと

森本栄一（昭和33年卒業）

○ 一番始めに先輩を知ったのは武谷さんである。夏休み1人体育館で練習していると、「お前1人か。」といわれたので「ハア。」とこたえた。黒の電車のセイフクを着たメガネをかけたけったいな人があらわれたなあと、まさ

か先輩とは思わなかった。でも1人で練習をしているので、しほってもらえると云う事が非常にうれしかった。このあとのことは忘れてしまった。

○ 一年生の秋の国体予選の時、普通の日であ

りながら、たくさんの人に練習を見てもらった時は、はりあいがあった。その時のメンバーは谷本さん — この時は非常にほそく、ひげのこいいのが印象的だった。吉川のモネジロウさん田中ショウケンさん、ウノさん、みんな学生服を着ていたように思う。さて国体予選が明石であった。その時先輩の数が14、5人位きて応援してくれた。名前をしらない人がたくさんあった。星陵と云うチームはOBがあってのチームだなあと、その時伝統と云うものはいいものだなあとつくづく思った。（そのかいなく、試合は負けてしまったが……）

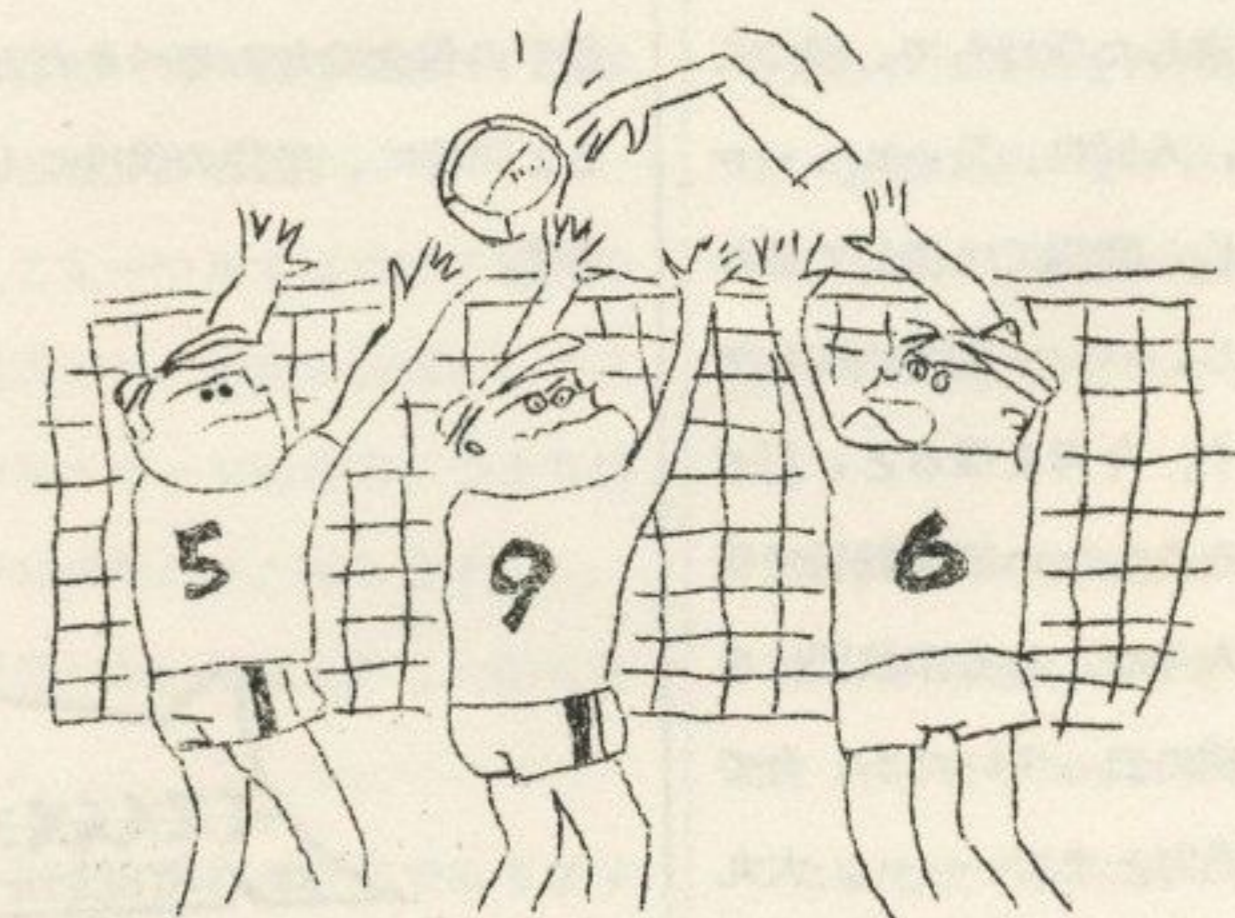
自分が現役の頃の先輩（永田さん、谷本さん、数井さん以下武谷さんまで）は、OB大会、その他試合に行ってもいつも練習していないのに試合に勝っていた。いったいどこで練習しているのかと思うくらいであり、特に田中ショウケンさんのバックセンターのレシーブが印象的だった。この頃にはボールひらいに行っても気持ちが良かったが、今のOBにそう云う点がない

のは、なにかさびしい気がする。それと、いつ集っても当時の先輩は非常になかがよかったので、うらやましく思ったものだった。

○ もう一つ非常に印象に残っているのが永田さんだ。大先輩の1人として聞いていたが練習の時のマナーとか、それ以外のマナーについて星陵のバレー部員としては「ずがしくない行動をせよ」といつも口やかましく云われていたが、それが現在迄のバレー部の伝統の一つになっている様に思った。

○ 須磨高校に練習試合に行った処、数井さんが須磨の練習をしほっている処であった。「お前等星陵やろ、なんで須磨みたいな弱い所と練習試合をするんや、やめて帰れ。」といわれて試合をしないで練習ばかりさせられて帰った事がある。本当におこられてこわかったので、それからは練習試合は絶対にしなかった。

この時数井さんとはこわい人やと思ったが先輩の仲間入りした時それがべんに吹きとんだ。



## バレーボール9年目

服部 要 (昭和39年卒業)

小生のバレー経歴も9年目に入り、それぞれの思い出多き日々を送ったが、その時代時代によって、感ずる時、又その内容はまったくと云って、程異った生活を……………。

先づ、中学時代、何も解からぬながら、排球部に入部し、何んとか3年間!

その内容は、楽しむバレーであった。しかし、伝統深き星陵バレー部では、良き先輩又同期のはげましによって、考え方は一変、先づ勝たねばならぬ! そして勝つことよりも、その練習内容が充実していなければ意味がない。そういうことをつくづく考えさせられ、厳しい練習に耐え、市内では優勝という名誉ある栄冠を胸にいただくことも出来、小生としては、思い出深い高校時代を有意義に過せ、実社会に入っても、未だ排球を忘れることさえできず、日夜、肉体的にもむりを重ね、励んでおります。此れも高校時代よりも、一步前進した気持ちで、勝つことよりもチームワーク、人間性、又、ヒューマンリレーションを重じ、職場では決して誰れにもひけめをとらずとし、バレー部で訓練してもらっているつもりです。今考え帰ると、好きだけではとうてい続きそうもない練習練習で実社会も3年目、周囲の人達は、ある宗教団体を一時、キチガイざたの様に云っていたが、今では黙認状態で、むしろ協力とまで……………。大丸バレー部も、それに近い非難の声もなきにしも

あらずで、朝は早くから退店時から又10時近く迄、猛練習という強行軍で、やっと今は2部(神戸市実業団)の仲間入りというところですが、才1線で活躍出来ることを、固く信じて毎日を過ごしておりますが、まだまだ満足出来るプレーでは有りません。此の様な事は云ってはいけないことかも知れませんが、此の機会を利用して、星陵クラブOBの皆様方をお願い申し上げます。今後共星陵クラブ以上に、大丸神戸店排球部の面倒を見て頂きたいと、監督以下14名が期待致しておりますので、よろしくお願い致します。

題目に上げた様に、私の望むプレーは、相手のミスによって、手をたくチームにはなりたくない。あくまでも自分のチームのポイントによって喜び合うチームが理想でもあり、又運動選手の信念でもあるべきだと自分に言い聞かせると同時に、星陵の現役にも望むところであります。以上



## 体育について

日本大学体育学部 今井 忠 (昭和38年卒業)

15周年記念誌発行を心よりおめでとうございまして申し上げますと同時に、星陵クラブが今後より以上に発展されることをお祈り致します。

記念誌発行に際し、私がこのような大切な原稿を書かせて頂けることは光栄なことでございます。

私は現在日大体育学部において学んでおります。

私も最初は体育学科は、体育教師となる為のものだ。という安易な考えでした。

一体何をするのか全然知りもしないでいたのであります。

体育学科とはつまり体育を専門に学ぶことであります。

体育の実技と理論を学ぶと同時に体育を通して人間として必要な体力、運動能力、社会に貢献出来る人格を形成せねばなりません。

中学、高校の体育と一番に異なることは、運動能力が必要であると云うことです。

その能力といっても一つがずばぬけて優秀であるというのも結構だが、体育の教師として必要な、広くあらゆるスポーツの能力、つまり技術と、その理論が大切なこととなります。

私はず専門過程においてぶっかった壁もそれでありました。

体育学科である以上、実技が中心であります故、数多くの実技があります。例をあげますと、

陸上競技、バスケット、体操、サッカー、ハンドボール、バレーボール、剣道、テニス、卓球、バドミントン、水泳、スキー、スケートといったところです。これらを文部省指導要綱に照らし合せ、学ぶ訳です。そこで大切なことは、自分から進んでそれらのスポーツになじみ、自ら研究することが特に欠かせなくなります。

上から与えられたことを、与えられた時間のみやっているだけではおいつきません。このことは他のあらゆることに通じることですが、

私は現在クラブ活動はしておりません。

クラブ活動において一つの専門をもつことは必要なことでありますが、一つのスポーツに集中してられないのが現状と云えます。

クラブ活動が出ましたところでクラブ活動について少し話させていただきます。

高校のクラブ活動においても先に話しました与えられた時間をただ過しているというだけでは、上達は遅いものです。

とは云ってもなかなか自覚しやれるものではありません。又それが当然のことかも知れません。

大学のクラブにおける競争は激しいものです。自分から進んで研究し、練習するということが、大学のクラブにおいては通常のことです。

たいしたことも書けませんでした。私の大学生生活を少し紹介したところでペンをおきます。

## 6 人 制 考

宇 野 一 成 (昭和27年卒業)

バレーボールの6人制、9人制は同根異種、異根同種と云うことで論争されているが、バレーボールを分解すれば、1)サーブ 2)攻撃 3)守備 4)ストップ とおおよそ4つの部門に分けられると思う。1964年の東京オリンピック開催決定以後は日紡貝塚チームを筆頭に、6人制を採用することにより日本バレーボール協会自体の動向が分裂? し始め、中体連の9人制、実連の6人制、9人制の兼用、学連、高体連の6人制とそれぞれの連盟により、9人制、6人制をやゝ複雑化している。

我々現役時代は、9人制1本で現在の様に両立はしていなかったが、6人制は6人制の、9人制は9人制の長所、短所がある。

切て、本題の“6人制考”は前述の4部門に分け、各々の相違点を考えれば6人制、9人制の面白味もわかるだろう。

### 1)サーブ

6人制のコートは9人制のコートよりも狭いし、又ネットの高さも高い。従って9人制サーブはスピード、強さ、等色々の打ち方が出来るが、6人制サーブは変化を持たせる事だけでサーブの面目を保っているのみである。

### 2)攻撃

ネットが高いのでスパイクのフォームも必然的に違って来る。9人制の場合はジャンプしてから自分の身体の全重量をボールに乗せて打てるが、6人制の場合は出来るだ

け腕を伸ばして高い位置でボールを打つ様にすることが必要となる。但し全日本クラスになる選手にはこの様な言葉は妥当ではないということは、6人制の場合の選手自身が投攻守の三拍子をととのえているので、9人制と同様に攻撃しなくてはナンセンスであるからである。

3)守 備 9米四方のコートを3人又は4人で守る必要上、守備範囲が広がるので、片手レシーブ、回転レシーブ等、9人制1本の時代では考えられなかったことが、当然であるかの様に重要視されている。又ホールディング基準が非常にやかましい為、9人制よりも指先きでボールをトス、パスしなくてはならない。

4)ストップ ネットが高いので9人制の様に手を左右に動かすことから前後に動かすことが主体となり、攻撃ボールに対するストップのオーバーネットもルール上可能である。

尚、愉快なことに9人制ではネットの上(オーバーネット)に、6人制ではネットの下(パッシング)にやかましいのである。

簡単ではあるが、以上で9人制、6人制の差の大体のところは判断出来たと思う。

我々OBはそれぞれの会社では実連に加盟していることではあるし、会社内に於ける社内対抗も9人制である故、星陵クラブも9人制を主体に考えていてもよいのではないかと思う。

## 「拜啓日本バレーボール協会殿」

武 谷 和 夫 (昭和30年卒業)

あなたは世界で他に類をみないスピードで一つのスポーツを普及させることに成功なさいました。1961年には日本で高校6人制バレーボールチームはゼロでありましたが、1年後には全国の高校に6人制のチームが誕生しました。一方9人制では1963年にそれ迄5000余りあった高校チームが一挙にゼロになりました。そして身近にいた沢山の指導者を失いました。そしてこの大きな変動がそのスポーツに直接携わるプレーヤーや、コーチの意志とは無関係に行われたのです。

二つのスポーツが同質のものであり、例えば9人制と6人制がルールを一部変えるだけで行なえるものであれば、このような変動は他のスポーツにもありました。即ちハンドボールの11人制と7人制の場合で、現在公式のハンドボールの試合は全部7人制で行なわれています。この7人制のルールは11人制のルールの教条に但し書を加えてあるだけでした。

一方、アメリカンも、ラグビーも、サッカーも皆フットボールと呼ばれますが、どれも異質のスポーツです。同様に9人制と6人制がバレーボールと呼ばれ方は同じでも、全く異質のスポーツであることは、ルールが違うことの他に、発展の歴史の違いや、亦、9人制のプレーヤーが6人制をマスターする為にどんな訓練が必要であったかという事を考えればおわかりの事と

思います。それは前田理事長のお書きになったものをみても、東京オリンピック選手強化部長池田久造常任理事の指導書にもはっきりと、9人制と6人制は異質のスポーツであると述べてありますから、あなたも認めておられることと確信します。

さて、高校生その他に一方的に6人制をやらせることにした時に、6人制をマスターすれば9人制もできるのだから、9人制の為にプラスになってもマイナスにはならないという論法で我々を納得させようとなさいました。しかしこの論法にはそのプレーヤーがすでに9人制の経験者であるという前提が必要だったのです。9人制の未経験者が6人制をマスターしても、それが9人制のプレーヤーになるためには、やはりそれ相当の訓練が必要です。9人制から6人制に転向する場合と同様に——ある意味ではそれ以上のものが、例えばセンスという面での訓練が必要です。

1955年東京においてアジアバレーボール選手権大会が開かれました。その時インドチームは6人制において唯一の相手チーム日本に乗ずるすきさえ与えませんでした。さてこのインドチームが大会終了後、交歓試合として全関東とか、全近畿といったチームと9人制でも対戦しましたが、善戦の域を出なかったのです。当時のインドは世界の強豪ソ連チームを招待し

て2勝している強チームでありました。それでも9人制ではナショナルチームの2軍と言えるチームに敗れております。

即ち6人制の一流プレーヤーは9人制でも一流プレーヤーであるとは言えないのです。勿論サッカー選手がする9人制バレーボールよりはずっとましなバレーボールを見せてはくれましよう。あなたの論法では、9人制は6人制プレーヤーが片手間にやるものでよろしいということになります。そこにあなたが、あなたの本来の役割を忘れておられる処があると思うのです。

いろいろのスポーツが盛んになるのは多いにうれしいことです。勿論6人制が盛んになるのも誠に結構です。その意味であなたが6人制の普及発展に力を入れられるのも、広くスポーツ界の為には結構かと思えます。しかし、あなたに9人制の発展を阻害する権利はない筈です。9人制バレーボールは、インターハイ、インカレを失いました。国体でも9人制はありません。来年からは中学校も6人制になるかもしれないということを知ります。つまり9人制は間もなくその正しい後継者を全く失ってしまうかもしれません。

いつぞや新聞のスポーツ欄に、「今迄の日本のバレーボールは鎖国状態の中で9人制を行ってきたが、6人制重点に移行することにより世界に目を開いたのである」との論旨の解説がありました。あたかもそれ迄の日本のバレーボールのあり方が間違っていたかのような印象を受けました。すべてスポーツは世界に目を開くことをもって値打ちが上ると言うのでしょうか。

一国でしかしていないようなスポーツは駄目だということは、スポーツに国を意識することであり、「スポーツに国境はない」というスポーツの精神を否定することです。剣道や空手をする者は、オリンピック種目の競技者に比べ肩身の狭い思いをしていなければならないのか。そのスポーツをする者が唯1人しかいないスポーツがあったとしても、スポーツの意義は少しも劣るものではありません。

ところで、あなたが9人制を犠牲にして迄6人制の発展を計ろうとするその目的は、世界の檜舞台に日の丸を立てたいということでしょう。ただそれだけのために、かつては国民スポーツとして才1位の普及率を誇り、競技として高度に発達した技術を持っていたあの9人制バレーボールの姿は消されようとしています。9人制はチーム数が減り、後継者がなくなるということの他に、9人制そのものがルールを改変され、以前の姿と違ったものになっています。ルールを改正するのは、試合進行上必要であるとか、危険防止の為とか、その改正の理由が、その競技から生じた場合にのみ認められるべきで、プレーヤーが納得できるものでなければなりません。6人制のルールに近づく為という全く政策的な理由による改変はプレーヤーの納得できるフェアな改正とは違うのです。いろいろ言われますが、競技として9人制特有の面白さは確かに少なくなりました。この現象がプレーヤーの責任により起きたものであれば致し方ないことですが、どんな権限があると考えておられるのか知りませんが、あなたが、プレーヤーの

意志と関係なく強制的になされたことの結果であるということに何とも納得しかねるのであります。

オリンピック憲章は、スポーツはあくまでも個人のものであり、国家、主義、思想等の為になすものではないとうたっております。今の日本のバレーボールは、協会の為の、6人制支持主義の為のスポーツではありませんか。ニチボ一貝塚が世界をめざして自ら6人制にとりくみ、そしてそれを成し遂げたことは誠に立派なことです。しかし一方で日本一をめざして9人制を続けることが間違ったことだったのでしょうか。なぜ9人制のプレーヤーも6人制をしなくてはならなくなったのでしょうか。

あなたは9人制をやりたい者は勝手にやっておれとは、あなたの名前の手前、言えない筈です。日本バレーボール協会は本来9人制の発展の為にありました。そう思えばこそ、各チームはあなたの傘下に入っていました。そのあなたが9人制バレーボールの発展を量的にも、質的にも阻害しようとは夢にも思いませんでした。そんな怖れがあるのなら、政治と同じように、バレーボール界でも、理事長以下協会役員はバレーボール愛好者全員の投票で選ぶべきでした。スポーツの連盟とか協会という組織は、そのスポーツの発展を計る為に存在するという憲法才1条が犯されているのです。あなたは9人制とその愛好者を裏切ったのです。背任行為であります。あなたに冷静に、正しくスポーツ精神を守るフェアな気持ちがあったなら、6人制を普及するに当り、組織をそのままにしておくこと

に当然疑問を持たれた筈です。あなたがバレーボールを指導する立場にあることは認めます。しかしあなたは、指導と支配を混同しておられるのではないのでしょうか。スポーツの真の支配者はプレーヤー以外の何者でもありません。プレーヤーが6人制のみならず、例えば3人制のバレーボールを始めたとしても非難されるものではありません。しかし、あなたにそれをさせる権限はありません。スポーツはするものであり、させる権限は何人にもありません。

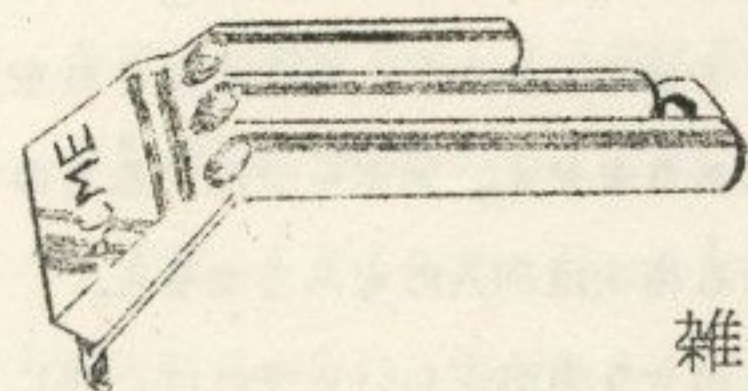
あなたのやり方が正しいとすれば、同じフットボールだからということで、メキシコに備えてサッカーの強化の為、ラグビー協会がインターハイをサッカーで行なうことも許されることになります。軟式庭球大会は硬式で行なえることにはありません。あなたは直ちに6人制バレーボール協会と名前を改めるべきです。そして日本バレーボール協会の名は9人制に返すべきです。そして高校、大学に9人制の試合を復活させることにより、チームを作り、あのすばらしかった9人制バレーボールを生んだ諸先輩の後継者を育てることです。今となつては、高校、大学に9人制のチームがどれ位生れるかわかりませんが、いずれは世界中に9人制を普及させようという、日本バレー協会の永年の希望も日本の9人制がもっともっと発展しておいてこそ可能なことではないのでしょうか。

6人制にとっても、協会を別にするには、もしその為にチーム数が少なくなることがあってももともとの筈ですし、それどころか今のよう



に、土台から浮離したピラミッドの底辺を広げる努力をするよりは、ずっとスムーズな発展が出来ると思います。

どうか、日本バレーボール協会殿、外国のバレーボールコートにひらめく日の丸の夢からさ



雑

私の同級生 親友 42才で死去

僕が星陵を卒業したのは昭和35年の春だから、今から6年前の事で、卒業後2年経って東京へ転勤させられてしまった。卒業後も神戸に居た間は、何とかバレーボールに接していたが東京へ来たとたんそれとのつながりが断たれてしまい、それからというもの、ボールさえさわったことがない。

ところが、神戸を思い出す時には必ずと言って良い程、星陵とバレーボールがそれについて来る。それも、面白かった事、楽しかった事ではなく、先輩の「怒鳴り声」とか「へど」を吐くくらいに苦しかった合宿練習と言った類のことが多い。しかしそれは考えてみれば至極当然の事で、うれしいとか、楽しいと言ったような事は案外心の表面で感じるに過ぎないのではあるまいか。逆に先輩が練習中に「怒鳴る」、又はチームメイトが励ます時、そんな時には「怒鳴る」方、「怒鳴られる」方、いずれも真剣で、

めて、スポーツの正しい在り方について考えて頂き、一刻も早く我が国のバレーボール界の混乱の原因から立ち直って頂くようお願い申し上げます。

感

嶋 田 勝 和

他意等介在する余地のない状態で、向い合っていたに違いないのである。それこそ正に、人間の心と心が触れあっている瞬間であろう。なぜなら、その瞬間には「今出来なかった事を次には出来るようになる」という方向に当事者の姿勢が、集中されているから。

形はどうであれ、このような人の心と心が触れ合うような機会が、学校生活の中ではそれほど多くはないと思うのです。しかし学校では少いとは言え、それは「あった」のですが、学校を出ると更に少くなる。

「星陵」「バレーボール」の二つが僕の脳の中に時々ではあるが浮んで来るのは、このような理由かららしい。

その「星陵」「バレーボール」が15年の歴史を持って今なお発展しているのはうれしい限りであります。

終り

# 一言集

アンケートヨリ

## 1、パスとは何ぞや

- 殺して受けて生かして送る (小林二郎)
- ボールを目的地にとばす事 (井上幸三)
- バレーの基本。これが出来なければ何も出来ない。但し飛ぶだけでは駄目。常にボールにこうして欲しいと物を云わせておかねばならない。 (永田 章)
- バレーボールの基本 (宇野一成)
- オープン攻撃又は速攻に対し常にトサーが充分に活躍出来るボールをもっていく事 (八木 弘)
- レシーバーとセッター或いはアタッカーを結ぶパイプの役目である。 (稲葉順一)
- 野球のキャッチボール (森本栄一)
- バレーボールそのものなり (島田勝和)
- バレーボールの基本 (塚本秀男)
- 原則的に手で行なうもの、稀に前額部を使う人あり (藤岡義典)
- 空気のようなものである。 (中島正人)
- 始めてバレーボールをする者でも好返球がかえせる様な球を送ること (山崎典雄)
- 英語でPASSであり、フランス語では○○○○ (楠沼謙太)
- ボールを地上に落すことなく、ボールをキープする事 (今井 忠)
- ポイントへのオ一段階 (小野徹太郎)
- 練習の始めにするもの (森本善之)

○バレーの基本で容易ならぬもの

(松山誠二)

## 2、トスの値打は

- トッサーの意志のまゝに上る時 (小林二郎)
- 大いにあり (井上幸三)
- 常にアタッカーに親切なものでなければならぬ。一見悪そうに見えても、親切なトスであればアタッカーは必ず良い攻撃をする。一見良さそうに見えても1人よがりなトスではアタッカーは良い攻撃をしない。トスに文句をつけるアタッカーにはろくな奴は居ない。 (永田 章)
- 緑の下の力持ち的存在 (宇野一誠)
- アタッカーが充分に相手の守備に対して攻撃出来た時 (八木 弘)
- やはり1点1点着実に点を重ねていくためにはトスの値打ちがあがってくる (松本健嗣)
- トスの値打はトッサーの頭脳のひらめきによって決まる (稲葉順一)
- そのトスでその人の頭のよさがわかる (森本栄一)
- アタッカーの好みに応じる事 (楠田良輔)
- Coinを投げるのと同じ、いかに落ちるか

で勝負が決まる (島田勝和)

- アタックを打つためのパスの延長 (塚本秀男)
- ネットにビターとひっついたやつが最高 (藤岡義典)
- ポイントにつながる (山崎義典)
- 僕のトスを見て下さい (柿沼譲太)
- ネットより高いのを原則とし、手のとどく範囲に上げてもらわぬと困る (山口竜雄)
- 得点できる攻撃のもと (今井 忠)
- アタックの良悪しを決めるオ一原因 (小野徹太郎)
- 最高である (森本善之)
- アタックの良し悪しにテキメンに影響するので価値大 (松山誠二)

### 3、アタックとレシーブはどちらがむづかしいか

- むづかしいのは同じ (小林二郎)
- レシーブの方がむづかしい (井上幸三)
- どちらも難しい。唯アタックには天分が必要である。その点レシーブは努力で最高のラインにまで達し得る事が可能である。(永田 章)
- 比較対象にはならぬと思う (宇野一成)
- 攻撃の時はアタックが守備の時はレシーブの方がむづかしい (八木 弘)
- 野球でも守備が早く上達するが、バッテ

ングはなかなか上達しないのと同様、レシーブもレシーブとアタックとではアタックの方がむづかしいと思う。(浜地克己)

- アタック (松本健嗣)
- どちらもそれ自体それ相当のむづかしいものである (稲葉順一)
- アタック (松本栄一)
- 打たれても打たれても拾いまくるレシーバーにアタッカーにない根強さを感じる (島田勝和)
- レシーブが難しい、アタックは良ければボールはこちらの意のままであるが、レシーブは相手の動きで動作を変えねばならぬため (藤岡義典)
- レシーブ、アタックを自分がやってみて、これほど簡単に出来るとは思わなかった (塚本秀男)
- どちらも最高のものをのぞめばむづかしいというのがほんとうだろう。だがどちらもそのむづかしいことを追求していく上にバレーボールのおもしろさがあると思う。(中 島)
- 攻撃は最大の防ぎょというが換言すれば、防ぎょがいかにむづかしいかということと解釈したい。(山崎典雄)
- レシーブ (今井 忠)
- アタックは花形、レシーブはエンの下の力もち (小野徹太郎)
- レシーブ (森本善之)

### ○アタック

アタッカーは相手チームの守備を見たり、打った後のフォローの点において難しいと思う (松山誠二)

### 4、サーブの打席に入る時あなたは何を考えましたか

- サービスエースをとること (小林二郎)
- サービスエースをとること (井上幸三)
- とにかく入れること、入れなければポイントも生じないし、チャンスボールも返つてこない。(永田 章)
- 無 心 (宇野一成)
- 試合当日最初のサーブの時はトスがうまく上るかどうか、二度目からはその日のサーブの調子がどうかという事。(八木 弘)
- 別に何も考えなかった。ポイントをとってやろうと思った時程サーブが入らないから (浜地克己)
- 別になし (松本健嗣)
- サービスエースをとること。特に相手チームのエースを狙い打って一泡吹かすこと。(武谷和夫)
- ボクの現役時代はそのヨユウなし (稲葉順一)
- 小生が何点取っておいたらあとで追いこされずに試合に勝てるかということ (森本栄一)
- 全く単独で敵をやっつけられるのはこの瞬間だけだ…… (島田勝和)

○無念無想。(藤岡義典)  
○やはり自分はアタッカーと違うから直接ポイントできるサーブには魅力があったのでサーブポイントを上ることを意識した。(塚本秀男)

- もちろん得点してやろうという気持ちで打席に立ちました。よく入れておくだけ入れておけといわれましたが、やはり人間ですの点ポイントを考えました。6人制では別ですが…… (中島正人)
- 打席によってちがう、ポイントしたと思った時……結局アウト。なんとか入れるところ……どうにか入る (山崎典雄)
- 左サイドラインから10cm5mm、バックラインから7cm8mmのところへ入れたらと小山、稲尾のようなことを考えた (柿沼譲太)
- 無 心 (小野徹太郎)
- 何も考えない (森本善之)
- 特別にはないが時々「失敗したらどうしよう」ということ (松山誠二)

### 6 人 制 考

○短身者からみると6人制は長身者しか出来ぬから賛成し兼ねる。長らく9人制でやってきたので、バレーの面白味から考えても制約が多すぎて、変化にも少々欠ける様な気がする。最近の試合をみるとゲームのスピードも増して面白くはなってきたけれど実際にプレーする側から考えると、多く参

加できる9人制の方が良いと思う。

(小林)

○少くとも<sup>小生</sup>6人の最も得意とするチエスト

トスが出来ない丈でも面白くない。

背が低い人間が1試合中通じて試合に出

場し得ないスポーツは恐らく6人制バレ

ーボール位なものだろう。これが今や

100万人のバレーボールがサッカーに

お株をうばわれた因ではなからうか。

(永田章)

○サーブが1回のため安全サーブ的なものしか出来ないこと。

ローテーションのため、9人制に比べ1セット中攻撃のチャンスがかぎられるように思えること。

アンダー・チエストが出来ないのでパスを根本的に練習しなければならないこと

(八木)

○6人制に反対、才一背の低い者には今のネットの高さではとうてい無理だ。

現在の6人制はただ力だけのバレーで柔よく剛を制すといったテクニックを十分に生かした技能的なものが見られない。

昔の9人制を復活すればバレー人口はもっと増加するのではないかと思う。

(浜地)

○現在の体力において守備範囲、攻撃力、ネットの高さ等を計算にいれると6人制では毎日でも練習をやっていけばヤッターが、今の状態では9人制でやっというところ

(松本健嗣)

○バレーボールのダイゴ味はタッチ、チエスト、そしてラリーにより面白さが決まるのでその要素をふくまないものは面白くない。日本人にあったバレーは9人制なのだから体の出来ぐあいを考えに入れないバレー協会はやめてしまえ。

6人制はニチポーと男子日本選抜チームのためにあり、協会役員M氏の売名行為だと見る。

30才を過ぎてからプレーすることを考えてみても、人間一生のスポーツになれるものが6人制の為に一生のスポーツでなくなる。人生のスポーツでないようなものはスポーツでない。それが日本の6人制である。

(森本栄一)

○日本人の体格に向いていない。バレーボール人口の増加を計るためには、こいつにあまり執着しない方が良い。(島田)

○僕等の時代は9人制でしたので、6人制の試合の経験はありませんが、やはりやり方は違っても今の6人制の根本は9人制です。今現在試合をみている、6人制をやっている人達は9人制の良さを理解して6人制をやっていけばもっとバレーボール界も発展するのではないでしょう(中島)

○あらゆるプレーで技より力が優先するので大きな体の選手が巾をきかず競技である。故に昔のような華麗なプレーは見られず、試合が味けなく、万事が大まかである。ただ、アタックだけ、レシーブだけ、トスだけといった片わのプレーヤーがなくなるの

は良い事であるが、規格品ぞろいになる怖れもある。(藤岡)

○私のような長身者のために生れた競技、私の万能ぶりを発揮できればうれしい

(山口)

○9-6=3で正選手が3人へるように思えるが、通常一般のチームでは9人制よりも正選手の数が多くなると考えてる。サイドアウト制のため9人制よりスタミナ(特にアタッカー)が必要だし、コートが狭くなったとは言える人も少ないのでレシーバーは、フットワーク、技術面にハッスルしなければならない。となると、アタックとレシーブはやはり分担してどんどん交替ということになるからである。したがって練習ではアタックができなくてもよい。(出来るにこしたことはないが)9人制以上にボールを返すことを目的としたものを多くする。

星陵現役チームは人数をもっとそろえることから始めてほしい。

- 奇説御免 - (山崎)

○高校で6人制が始まったのは我々の時代だったので、9人制と6人制の両方の現役時代を持っている。今から思うと6人制の方が楽しかったように思われる。(6人制のルールはおかしい処があると思うが……)

(森本善之)

## チームメイトを語る

○井上・海老原(永田) 小生と併せてバレー狂の3人、年中休みなくボールと遊んだ思い出は一生残るだろう。試験期間中もボールを離さなかったのは我々以外もうないのじゃなからうか。 - 小林二郎 -

○エッチューこと谷本

彼のアダナはその名の如く常に越中ふんどしを着用して居たからである。我々が笑うと彼はよく云ったものだ“これをしていると絶対にインキンにかからない”と。然し小生よく考えるにこれよりももっと対女性に便利な事のウエイトの方が重かったのではないかと思う。

名うての女性キラーと越中ふんどしの奇妙な組み合わせであれば小生の思いも不思議ではなからう。

又インキン最良の治療方法はヒリヒリするけれどもタムシチンキを患部にぬって天日にさらしながらうちわであおぐ事だと教えて呉れたのは確か彼であるからどうも彼も運動選手独得のこの病いにかかって居たらしい。さすれば“素早く”と云う方の効用が大であったのだろう。

どうも最近を着用してないようだがこれは年をとってその必要がなくなったと云うのではなく、最近では昔のサルマタでなく、ブリーフと称する越中ふんどしより便利で素早いのが出来たらしい。

但しチームメイトとして断っておくが彼の